

京北町出土中世遺物と丹波型瓦器碗

伊野近富

はじめに

上中城跡で出土した遺物は、旧丹波国内でどのような位置を占めるのか。本稿は京北町内で出土した遺物を紹介し、その位置を明確にしたい。さらに、丹波特有の瓦器碗である丹波型瓦器碗についてその特徴を明示し、今後の研究の指標としたい。

1. 京北町出土中世遺物

京都市右京区京北町で出土する中世遺物は、土師器皿、瓦器碗・皿、須恵器鉢・甕、陶器壺・甕、古瀬戸碗・皿、中国製白磁碗・青磁碗などである。また、希少な遺物としては高麗・朝鮮王朝陶磁や石鍋がある。今回提示したのは塔遺跡、上中遺跡、藤原経塚（毘沙門谷遺跡）、東山遺跡の4遺跡である。京北町の遺跡は白鳳時代の寺である周山廃寺を中心として「V」の字状に2方向に延びる谷に存在している（図32）。「V」の字の左側（京北町西部）に上中城跡・上中遺跡、右側（京北町東部）に塔遺跡、藤原経塚（毘沙門谷遺跡）、付け根（京北町中央部）に東山遺跡が位置している。主要遺跡の出土遺物を図示した（図33）。なお、（）内番号は報告書掲載図の番号である。

塔遺跡（京都府埋文セ1995）では緑釉陶器碗、須恵器壺・鉢、土師器皿、瓦器碗が出土している。1～8は土坑6から出土した。1～6はいわゆる「て」の字状の土師器皿である。薄手で平安京内膳町跡SK19段階と1段階古い段階に相当し（京都府1980）、10世紀中ごろから後半である。平安京内で出土するタイプと近似している。7は近江系緑釉陶器碗である。一般的な近江型緑釉陶器の高台には、その内側が段状を呈しているが、本例はなく初期の製品と考えられ、10世紀前半から中ごろである。8は須恵器壺である。口縁部の形状から亀岡市篠窯で、10世紀前半である。京北町内で出土した緑釉陶器は上中城跡（上中遺跡）と本例の2例が確認されている。また、篠窯須恵器壺は1例だけであり、これらが平安京で多く出土し、地方では国府などの有力地で多いことから、平安時代中期の塔遺跡は有力地であったことがわかる。

9・10・13は土坑10から出土した。9・10は瓦器碗である。表面が摩滅しミガキの有無は不明だが、口径が11.6～12.5cmと小さく、丹波型Ⅲ-4期（後項で編年を提示する）で、13世紀後半である。13は東播系須恵器こね鉢で、口縁部がやや分厚く、外形がシャープでないで、13世紀末から14世紀前半である。11・12は包含層出土の瓦器碗である。口縁端部内面に沈線を施しており、楠葉型模倣であり、12世紀に相当する。楠葉型模倣については後述する。

京北町教育委員会による上中城跡（上中遺

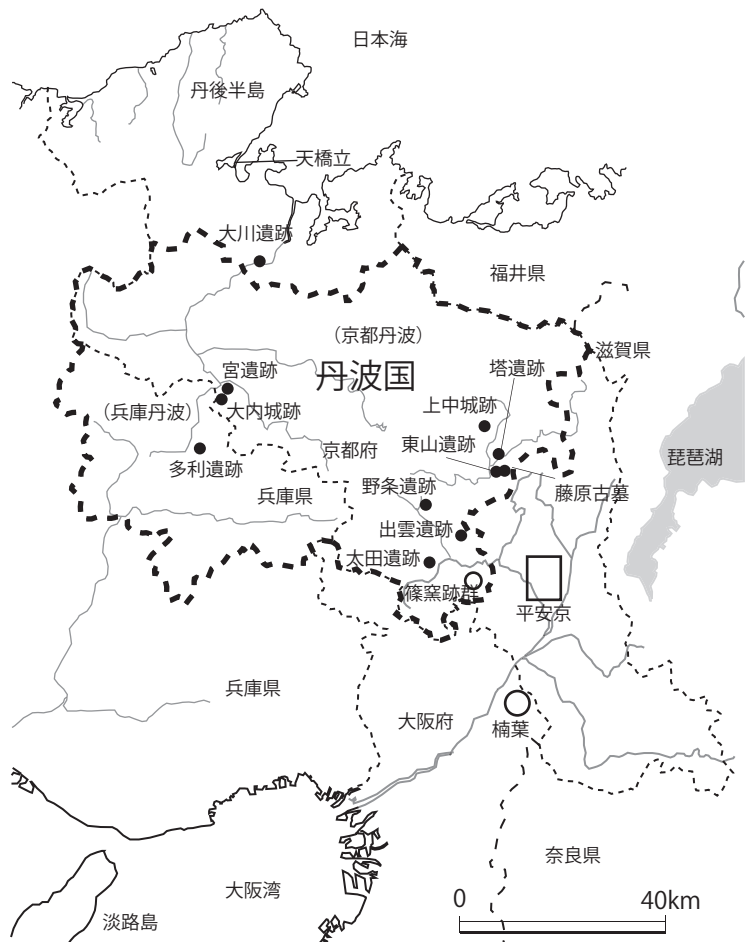


図32 旧丹波国と主要遺跡

跡)の発掘調査(京北町 1995)では、緑釉陶器碗か皿、須恵器鉢、土師器皿、瓦器皿・碗、陶器天目茶碗、中国製白磁碗が出土している。14～16は城跡の北方で出土した。14は東播系須恵器こね鉢である。口縁端部はやや分厚く、13世紀代である。15・16は陶器天目茶碗である。形状から古瀬戸から瀬戸・美濃大窯製品で14～17世紀である。17は京都系緑釉陶器碗もしくは皿の底部である。削り出し高台であるため、京都系と判断した。また、釉色は淡緑色である。18・19は城跡の南西方で出土した。18は瓦器皿である。口径は8.8cmで、12世紀後葉である。19は瓦器碗である。高台は低くなっており、丹波型Ⅲ－3期で13世紀後半である。20～23は城内で出土した。20は中国製白磁碗である。高台の形状から中国南部福建省周辺産で、12～13世紀であろう。21は瓦器碗である。19より高台は低くなっており、丹波型Ⅲ－4期で13世紀後半である。22は土師器羽釜である。口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部は内側に肥厚させたもので、14世紀代の大和型土釜である。23は瓦器鉢である。内面に1本ずつ刻線を施し、摺り目としたものである。丹波鉢と形状が似ており、その安価な代用品であろう。口縁部がやや内傾するので16世紀代と考えたい。

藤原経塚(毘沙門谷遺跡)(京都府 1980)では瓦器碗、中国製青磁碗が出土している。経塚は塔遺跡などがある丘陵部から南側で、上桂川のほとりにあった。24・25は瓦器碗である。口径は11.5cm前後で、体部内面には粗いミガキが施される。高台は低くなった段階で、丹波型Ⅲ－4期に相当し13世紀後葉である。典型的な丹波型瓦器碗である。26・27は中国龍泉窯青磁碗である。26は無文で、27は体部外面に立体的な鎬蓮弁文を施す。田中克子編年Ⅲ期(田中 2016)では、13世紀前半に比定されているが、福岡市報告では文永二年(1265)と墨書された資料があり、13世紀中葉までは一般的に使用された可能性がある。

東山遺跡は(京都府埋文セ 2001)、京都市街地から京北盆地に入ったところで、上桂川に向かって北側に張り出す丘陵上にある。川を隔てた北側には周山廃寺があり、北西方向には戦国時代末期の周山城跡がある。古代から中世にかけて物流が行きかう結束点であり、拠点的な場所の一画にある。

遺物には土師器皿・羽釜、瓦器碗・鍋、東播系須恵器鉢、中国製青磁碗、天目茶碗、石鍋などがある。47の石鍋はSK23出土、32～35の土師器皿がSK35出土で、これ以外は包含層出土である。28は黒色土器A類(内黒)の高台で、内面にヘラミガキが顕著に認められる。平安時代であろうか。丹波や丹後地域では、中世の黒色土器は鎌倉時代初めまで生産されているが、底部は糸切りであり、本例が貼り付け高台と考えられることから、平安京などの都市部からの土器に影響を受けたものと考えられる。SK35出土土師器皿の口径は7.5～8.5cmであるので、鎌倉時代である。36～39の土師器皿の口径は8～8.5cmであるので、SK35出土品よりやや大きいことからやや古く、平安時代末期から鎌倉時代(12世紀後半～13世紀)である。40～45は瓦器碗で、40は口径11.5cm、45は口径14cmである。小ぶりのものは高台がかろうじて付くもので丹波Ⅳ－1期、すなわち鎌倉時代後期(14世紀前葉)と考えられる。30は天目茶碗と報告されている。31は東播系須恵器こね鉢である。口縁部がやや分厚くなっており、また、上方につまみ上げていることから14世紀前半である。46は大和型土釜(土師器羽釜)である。47は長崎県に主要な生産地がある滑石製石鍋である。京都では平安京(中世京都)を中心に有力地で出土する。48・49は京都系の瓦器鍋である。体部から口縁部は「く」の字状で口縁部があまり屈曲しないタイプで鎌倉時代である。

以上、京北町内で出土する土器・陶磁器の構成は、丹波地域の中世遺跡で出土するものと同様である。在地の土師器皿、丹波国内の瓦器碗、丹波すり鉢を模倣した瓦器鉢を基調とし、近国である播磨国の東播系須恵器こね鉢、山城国生産の瓦器鍋などをもつ。中世の有力地では中国製白磁・青磁、九州長崎産石鍋を少量所有することも一般的な特徴である。しかし、京北町内で特徴的な点もある。体部外面にタタキを施す丹波型鍋(播磨にも多いので播丹型ともいう)が一般的に出土する丹波地域にあって、山城型鍋・釜に交じって、一定量大和型土釜(土師器羽釜)が出土することである。14世紀と考えられるこの製品が目立つことは、この時期に大和とのつながりが深かったことを示している。この状況は中世京都でも同様であるので、大和一京都一京北という関係が窺われる。

なお、塔遺跡と上中城跡では京都系の「て」の字状土師器皿、篠窯須恵器鉢・壺、緑釉陶器、近江系緑釉陶器が出土したことは注目できる。これらは平安京から全国の国府およびその周辺で出土するのである。平安時代中期における2遺跡は中央との結びつきが深かったといえよう。

2. 丹波型瓦器碗

丹波型瓦器碗については橋本久和による研究を嚆矢とする。上牧(かんまき)遺跡報告書(橋本 1980)で、近畿

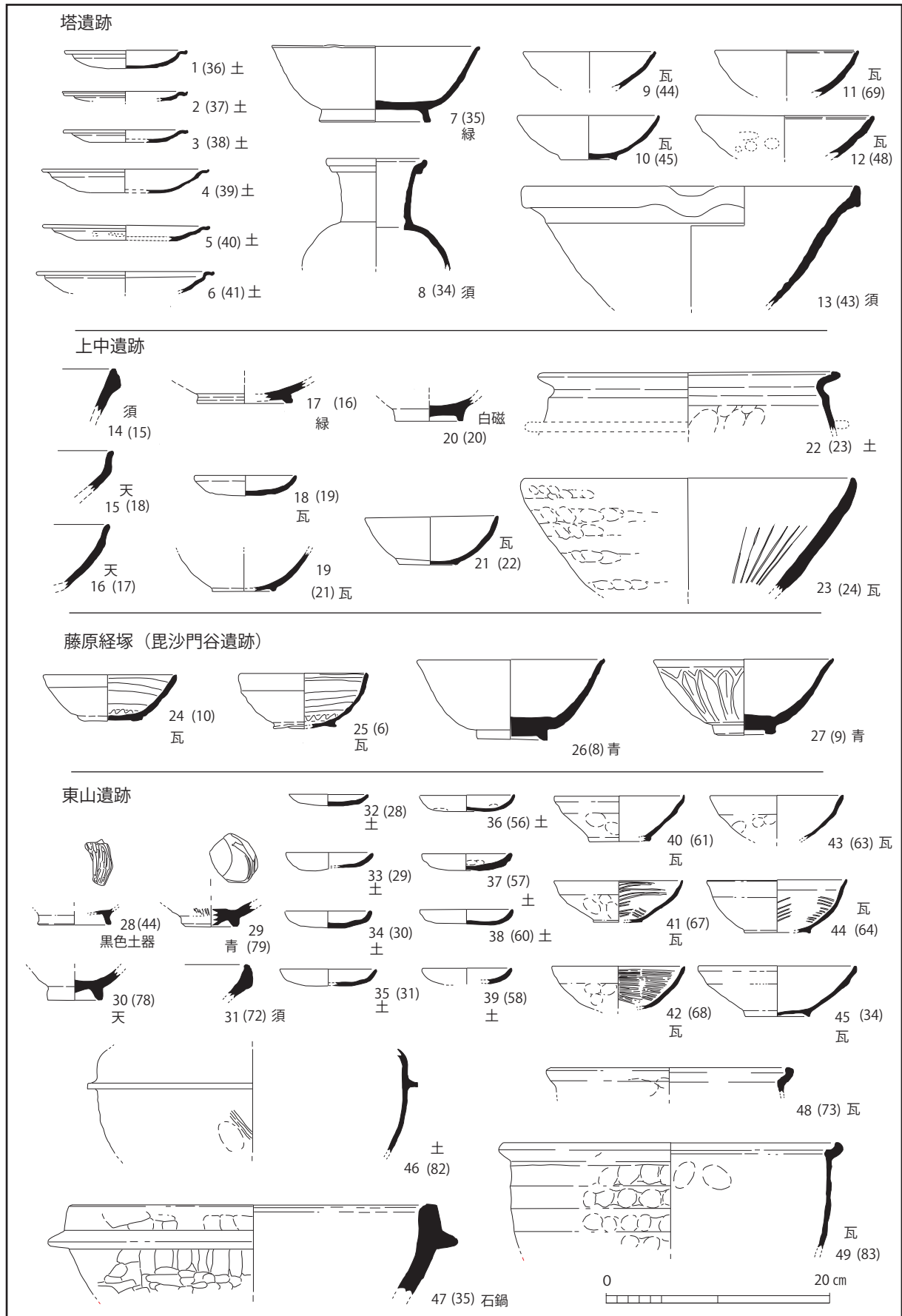


図 33 京北町出土の中世遺物

で出土する瓦器碗を楠葉型・大和型・和泉型・丹波型の4類型にわけて、旧国単位に生産されていたことを予想した。丹波型のみ研究としては、亀岡市出土例（伊野ほか 1985）や福知山市大内城跡出土資料（伊野 1984）での編年案を作成し、1995年には丹波地域で出土する中世土器の編年を公表（伊野 1995）した。これらの作業によって明らかとなった丹波型の特徴は、他の3型式に比べて①口径に対して底径の占める割合が大きい。②体部は内湾気味に立ち上がるものや、直線的なものがある。③口縁部は肥厚し、外面を強くなでる。口縁端部から1cm程度離れた箇所が分厚いものが多い。④丹波型初期に出現する楠葉型模倣以外に、口縁端部内面に沈線は施されない。以上である。

図34で4類型のⅡ-1期、Ⅲ-1期、Ⅳ-1期段階の瓦器碗を抽出した（橋本 2018、丹波型と口縁部イメージ図は伊野作成）。口縁部に注目すると、口縁端部から数ミリ内側に1条の沈線を施す楠葉型と、口縁端部内側に段をもつ大和型、そして何も施さない和泉型・丹波型とに分かれる。プロポーションの大きな変化は4類型とも同じで、口径が大きいものから小さいものへと変化する。高台が退化していくこと、体部内面に施されたミガキが密なものから省略され、外面はⅡ期で消滅し、内面も粗雑化する。口径が縮小する意味は、古代律令体制で制定されていた度量が、古代から中世にかけて土器づくり集団の生産を保証していた荘園領主が衰退し、新興（武士）勢力が台頭することによって、掌握できなくなって、縮小化したと考えた（伊野 1987）。

図35は楠葉型と丹波型の口径と底径との関係を図示したものである。Ⅱ期に限定したが、丹波型は楠葉型に比べて15～17cmと口径が大きく、また、底径も5.5cm以上と大きいことがわかる。ただし、ばらつきも多い。これに比べて楠葉型は分布範囲は小さく、しかも、図では表現できなかったが、口径15cm、底径は5cm程度がもっとも多い。

図36は丹波各地で出土した瓦器碗をもとに編年したものである（引用文献の項参照）。伴出した土師器皿と東播系須恵器こね鉢、および輸入陶磁器から組列を考えた。

個々に説明する余裕はないので、各報告書や伊野文献を参照していただきたい。なお、詳細は別稿を執筆中である。

プロポーションは3種ある。aは口縁部が直線的に外開きし、体部も直線的な杯様である。bは口縁部がやや内湾し、体部が丸みを帯びた碗様である。cはその他で浅い碗様のもの（浅碗）と、体部が屈曲した（屈曲様）ものがある。

橋本編年では楠葉型・大和型・和泉型にはⅠ期から設定されているが、丹波型ではこれに相当する資料は提示していなかった。しかし、報告書を精査した結果、南丹市八木町池上遺跡資料がⅠ-2期に比定できることを確認した。Ⅰ-2期は南丹市池上遺跡3・4次SXC05とSKC10の2つの瓦器碗を提示した。いずれもプロポーションbで、口径は15.6cm、底径は5.6cmである。SXC05資料（36-1）が平安京左京内膳町SD41A新相の土師器皿と共伴し、SKC10資料（36-2）が平安京左京内膳町SE288下層の土師器皿と共伴しており、11世紀後葉から12世紀初頭ごろと考えられる。なお、36-2の瓦器碗は、口縁端部内面に1条の沈線を施す楠葉型模倣である。

Ⅱ-1期は南丹市野条遺跡第10・12次SD01の瓦器碗を提示した。プロポーションbで、口径15.4cm、底径5.4cm、体部外面のミガキはほぼ全面に施される。口縁端部内面に1条の沈線を施す楠葉型模倣である。SD01で資料化された口縁部が残存した16点の内、15点が楠葉型模倣である。内底面にはジグザグ状暗文が施されるが、まれにラセン状暗文の資料もある。

Ⅱ-2期になるとプロポーションはa・b・cの3種に増える。福知山市大内城跡資料（a:36-4）、福知山市後正寺古墓資料（b:36-5）、舞鶴市大川遺跡資料（c:36-6）を提示した。舞鶴市は丹後国ではあるが、丹波国の隣地であり、丹波型供給範囲に含まれている。これらは体部外面のミガキは密なものからやや雑に施されるものに変化する。36-5は口縁部をつまみあげたものである。36-6は口縁端部内面に1条の沈線を施す楠葉型模倣である。内底面にはジグザグ状暗文が施される。他の例に比べて器高は低く浅碗様である。Ⅱ-3期になると体部外面のミガキはさらに粗雑なものとなり、ミガキが施されない箇所が多くなる。暗文はジグザグ状とラセン状の2種がある。

Ⅲ-1期ではほぼ外面のミガキは施されない。亀岡市出雲遺跡SD03資料はプロポーションbで、口径14.6cm、底径7.2cmである。SD03資料では暗文がわかる20点全てジグザグ状暗文である。Ⅲ-2期では良好な資料は少なく、ここでは亀岡市北金岐遺跡SE24資料を提示した。この資料には古相と新相があり、ここでは古相例を提示した。外面のミガキは消滅し、内面のミガキも粗雑になる。また、高台も3角形となり、畳付けは面をもたなくなる。Ⅲ-3期ではプロポーションは亀岡市太田遺跡SE60掘方（a:36-13）、亀岡市北金岐遺跡SE24資料新相（b:36-14）、福知山市宮遺跡A地区（c:36-15）の3種が認められた。宮遺跡では口縁部が外側に屈曲したプロポーションc（屈曲様）が認められる。高台はさらに退化し低くなる。Ⅲ-4期では亀岡市観音芝廃寺土坑（a:36-16）、亀岡市河原尻遺跡SK17（b:36-17）、亀岡市観音芝廃寺土坑（c:36-18）を提示した。36-16の体部は直線で

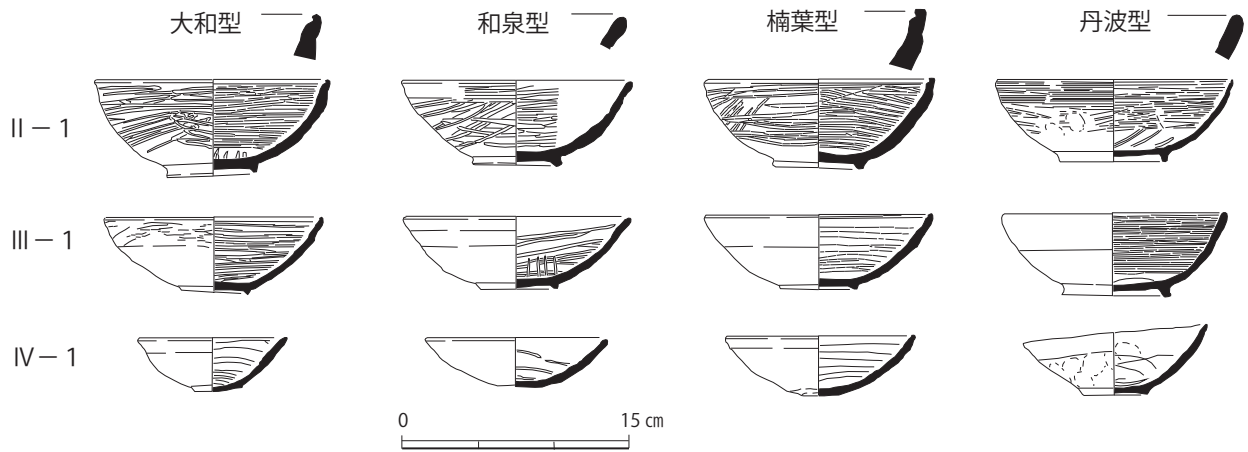


図 34 各種瓦器碗

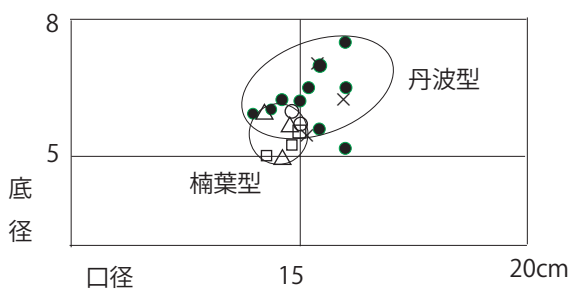


図 35 口径・底径の対比

- 楠葉型 II-1 はなく、やや内湾しており、典型例ではない。内面のミガキもさらに粗雑になる。
- △ 楠葉型 II-2 また、高台も低い三角形となる。
- 楠葉型 II-3 IV-1 期では亀岡市犬飼遺跡堀 (a:36-19)、亀岡市北金岐遺跡 SE4 資料 (b:36-20) の 2 例を提示した。体部が歪になり、内面のミガキはほとんど施されなくなる。高台は低く、外底面とほぼ同じになる。
- 野条 SD1
- × 野条 SE3 IV-2 期では良好資料がないが、福知山市

奥谷遺跡資料を提示した。高台部分は欠損している。口径は小さくなり、内面のミガキは内面の一部だけとなる。高台も消滅している段階である。

図 37 は 8 遺跡の資料を提示したものである。南丹市野条遺跡は旧八木町の主要な集落と溝により区画された遺跡である。ここで出土した瓦器碗はプロポーション b であるが、体部は下膨れのような特徴をもつ。大川遺跡は丹後国の範囲である舞鶴市の由良川沿いの遺跡である。丹後国の中世前期の碗製品は黒色土器（内黒が多い）であり、器高が低い製品である。大川遺跡の瓦器碗は 37-4・37-5 のように器高が低いのが特徴の浅碗タイプである。口縁端部内面に 1 条の沈線を施す楠葉型模倣であるので、2 つの地域の影響を受けた製品である。37-3 は碗形で楠葉型模倣であるが、沈線はなく、丹波型の初期例である。

福知山市大内城跡は六人部（むとべ）荘の荘官屋敷跡で、大量の瓦器碗と土師器皿が出土した。近隣の村である福知山市宮遺跡からは瓦器碗が出土したがプロポーション c の特徴的な屈曲碗タイプ（37-12）であった。また、土師器皿は在地で普遍であった糸切り底であり、大内城跡がすべて手づくね製品であることと大きな違いがある。すなわち、政治的に有力な場所では在地産ではあるが、京都系の成形技法であるてづくねの土師器皿を使用していたのである。37-8・37-9 は瓦器皿である。37-10 は深手の珍しい製品である。

多利遺跡は兵庫県氷上郡旧春日町にあった在地領主の館跡である。いわゆる兵庫丹波と呼ばれる地域である。ここではプロポーション b の丹波型瓦器碗とともに、糸切り底の瓦器皿が出土した。なお、兵庫丹波から播磨東部では稀に糸切りの瓦器碗があることを早い段階に山本三郎が紹介している（山本 1976）。京都丹波では基本的に使用されていないタイプである。なお、多利遺跡報告では、当該遺跡出土の瓦器碗の特徴として薄手であることが指摘されている（図 37-14）。狭域に供給した生産者の存在が想定される。

亀岡市観音芝廃寺は奈良時代に始まる寺院であるが、中世の遺構も確認されており、講堂跡北側で検出された土坑資料を提示した。37-15 は体部内面のミガキは粗い渦巻き状に施されており、新しい傾向である。37-16 はプロポーション c の浅碗様である。亀岡市河原尻遺跡は丹波国府近隣の遺跡である。古代から丹波国の中心地であった。亀岡市犬飼遺跡は摂津国へ通じる道の近隣に造成された居館である。現大阪府能勢町は旧摂津国で、大里遺跡や野間遺跡で犬飼遺跡と同時期の丹波型瓦器碗が出土している。丹後国や摂津国など丹波国近隣地にも丹波型瓦器碗が使用されたことがわかる。

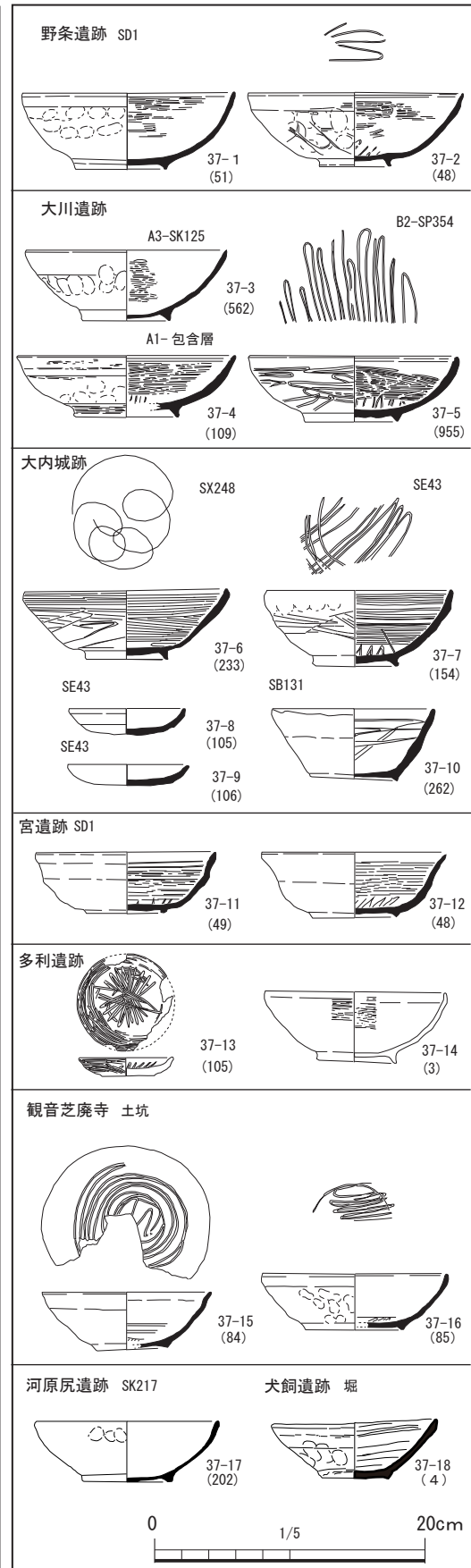
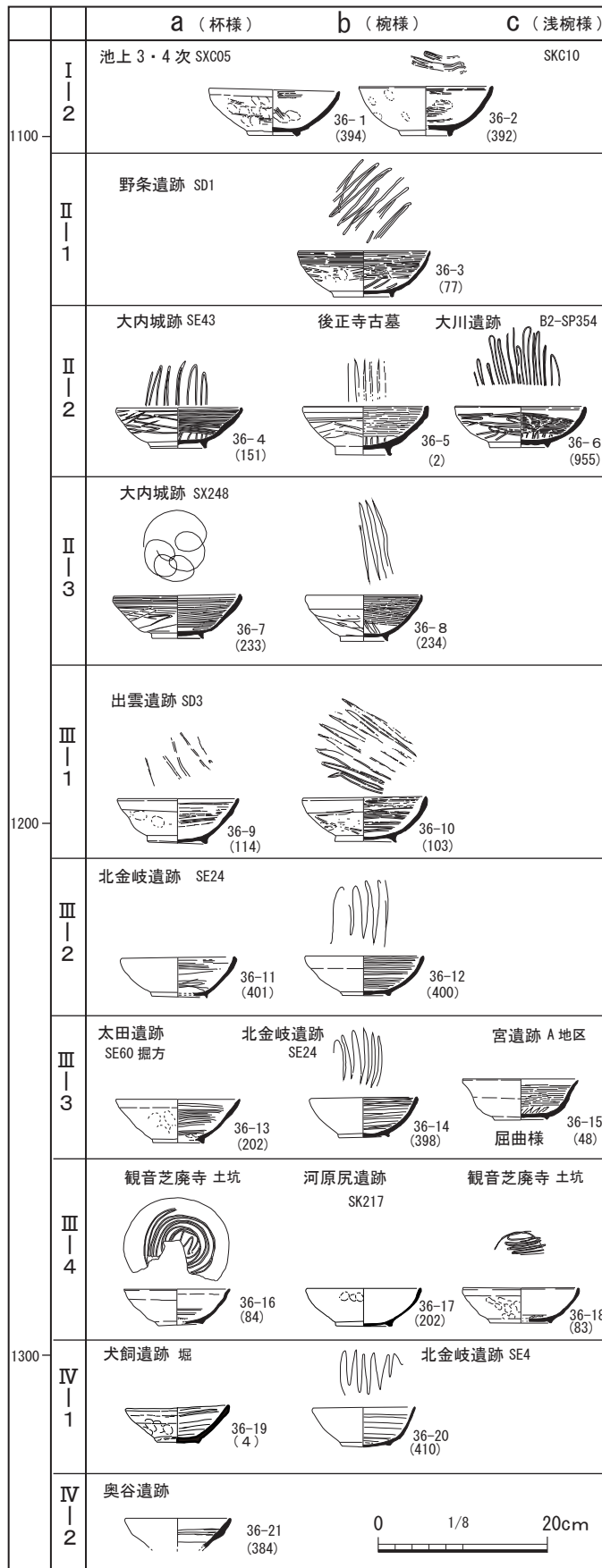


図 36 丹波型瓦器碗編年図

図 37 主要遺跡の丹波型瓦器碗・皿

3. 上中城跡出土高麗・朝鮮王朝陶器

高麗・朝鮮王朝陶器が、なぜ上中城跡に搬入されたのか。この搬入経路を考えてみよう。高麗・朝鮮王朝陶器は平安京～中世京都でも出土例は多くなく、2007 年段階での京都府埋蔵文化財調査研究センター調査地での出土例は183 件中4 件である（伊野 2015）。全国的にも、海外貿易の拠点である博多を別とすれば、島根県益田市の中須東原遺跡が群を抜いて多く、459 点出土している（村上 2013）。日本海沿岸の遺跡では点々と出土しており、日本海ルートで運ばれてきた可能性が高い。しかし、詳細に見れば中須東原遺跡では、高麗時代の青磁・白磁は12 点しかなく、表面がざらついた灰青陶器が中心で、削り出し高台内は兜巾（ときん）状と呼ばれる小さく円錐状に突起する15 世紀代のものである。これに対して、上中城跡の場合は硬質で、削り出し高台内は兜巾状に突起する部分を削って平滑にしており、ひと手間かけたやや古いタイプと考えられる。したがって、高麗から朝鮮王朝初期（14～15 世紀前半）とすると、中須東原遺跡を中心とした日本海ルートがまだ確立していない時期のものである。

最近調査された舞鶴市大川遺跡では高麗・朝鮮王朝陶器が21 点出土した。小型碗や皿のほか壺類が多く、高麗末期から朝鮮王朝初期の象嵌青磁瓶子のような上質品もある。12～14 世紀を中心としたこの遺跡では、15 世紀以降の灰青陶器はない。すなわち、中須東原遺跡を中心とした日本海ルート以前に、丹後半島周辺で中世前期日本海ルートが存在した可能性がある。丹後国府がおかれた宮津市府中周辺では、朝鮮王朝陶器が2 点出土している（中島 2017）。しかし、15 世紀以降であるので、やはり、中世前期は舞鶴市周辺が交易の拠点と想定したほうが妥当である。

なお、別ルートが存在した可能性もある。石清水八幡宮の荘園が多い九州と石清水八幡宮では14 世紀中葉から15 世紀前半に比定される高麗象嵌青磁碗が出土しており、藤本史子は石清水八幡宮ネットワークの存在を想定している。上中城跡近くには八幡宮がある。平安時代の仏像や室町時代の懸仏などが安置された弓削庄の信仰の中心地であった。しかしながら、弓削庄はこの時期天竜寺の荘園であり、暦応3 年（1340）に光厳上皇が歴応寺（天竜寺）造営のため寄進したとの由来がある。当時の有力寺院が船を仕立てて中国と貿易をしていたことは、韓国新安沖沈船の例（東福寺と書かれた木簡出土）がある。一般的に流通していた中国龍泉窯青磁などとは別の大寺社ルートが存在したのかもしれない。

おわりに

丹波国内では丹波型瓦器碗の内、プロポーション a と b とが広く分布していた。京北町独特のプロポーションは発見されていない。丹波型瓦器碗は他国との境界付近は例外として、一国を超える供給体制にはなく、小型品である土師器皿とともに在地もしくは郡内生産品で占められていた。鉢や甕、壺などやや大きなものは近隣諸国から供給されていた。なお、京北町の中世遺物で注目すべきは、14 世紀の大和型土釜（土師器羽釜）が目立つことで、この時期は大和や中世京都とのつながりが深いことを示している。

上中城跡の高麗・朝鮮王朝陶器の搬入については、丹後半島周辺で中世前期の日本海ルート（舞鶴）が存在した可能性を指摘した。大動脈である瀬戸内海ルートからもたらされた面的に流通するものとは違い、上質な高麗・朝鮮王朝陶器のような嗜好品は、点と点を結んだ線状ルートがあって、遺跡で出土する場合、複数のルートが重複した結果であった可能性を指摘しておきたい。

参考・引用文献（（財）京都府埋蔵文化財調査研究センターは京埋セと省略する）

山本三郎 1976 「丹波出土の瓦器について」『兵庫考古』第4 号

橋本久和 1980 「第3 節 瓦器碗の地域色と分布」『上牧遺跡発掘調査報告書』、高槻市教育委員会

平良泰久・伊野近富他 1980 「平安京跡左京内膳町発掘調査報告」『京都府埋蔵文化財調査報告書』、京都府教育委員会

伊野近富 1984 「編年」『京都府遺跡調査報告書 第3 冊 大内城跡』、京埋セ

石井清司・引原茂治・伊野近富 1985 「亀岡盆地出土の瓦器について」『京都考古』第37 号、京都考古刊行会

石井清司・中坪央暁 1985 「北金岐遺跡」『京都府遺跡調査報告書 第5 冊』、京埋セ

脇田晴子 1986 「中世土器の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ、日本中世土器研究会

伊野近富 1987 「「かわらけ」考」『京都府埋蔵文化財論集』第1 号、京埋セ

辻本和美ほか 1987 「宮遺跡」『京都府遺跡調査報告書 第10 冊』、京埋セ

京北町出土中世遺物と丹波型瓦器椀

加古千恵子ほか 1987「多利遺跡群発掘調査報告」『兵庫県埋蔵文化財調査報告書』第 46 冊

樋口隆久 1988「観音芝廃寺発掘調査報告」『亀岡市文化財調査報告書』第 20 集、亀岡市教育委員会

伊野近富 1995「中世土器の編年（上）」『京都府埋蔵文化財情報』第 57 号、京埋セ

小池寛 1995「塔遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 64 冊、京埋セ

人魯亨 1995「上中城跡第 2 次発掘調査概報」『京都府京北町埋蔵文化財発掘調査報告書第 5 集』、京北町教育委員会

谷口悌他 2000「池上遺跡発掘調査報告書 - 第 3 次・第 4 次調査」『八木町文化財調査報告書』第 6 集、八木町教育委員会

中川和哉他 2000「池上遺跡第 5 次発掘調査概報」『京都府遺跡調査概報』第 99 冊、京埋セ

中川和哉 2001「東山遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 92 冊、京埋セ

増田孝彦ほか 2001「太田遺跡第 13 次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 99 冊、京埋セ

竹原一彦・森島康雄 2005「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成 15 年度発掘調査概要（河原尻遺跡）」『京都府遺跡調査報告集』第 114 冊、京埋セ

高野陽子ほか 2008「野条遺跡第 10・12 次、室橋遺跡第 5 次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第 128 冊、京埋セ

村上勇 2013「高津川・益田川河口域の港湾遺跡群出土陶磁の背景」『中須東原遺跡』、島根県益田市教育委員会

伊野近富 2015「京都府内出土の輸入陶磁器」『京都府埋蔵文化財情報』第 128 号、京埋セ

田中克子 2016「日宋貿易期における博多遺跡群出土中国陶磁の変遷と流通―博多に残されたものから国内流通を考える」『中世陶磁器の考古学』第 3 号、雄山閣

伊野近富・綾部佑真ほか 2016「由良川下流部緊急水防災対策事業に伴う平成 24～26 年度大川遺跡発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第 164 冊、京埋セ

高野陽子他 2016「出雲遺跡第 15・16・18 次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第 166 冊、京埋セ

藤本史子 2016「石清水八幡宮ネットワークによる中世土器・陶磁器の流通」『中近世陶磁器の考古学』第 3 巻、雄山閣

中畠陽太郎 2017「中野遺跡出土の貿易陶磁器の中世後期京都産土師器」『中近世陶磁器の考古学』第 7 巻、雄山閣

橋本久和 2018『概論 瓦器椀研究と中世社会』、真陽社

* 奥谷遺跡：大内城跡報告と同じ

犬飼遺跡：山本梓・引原茂治 2020「丹波地域における瓦器椀の地域性」『京都府埋蔵文化財情報』第 138 号、京埋セ

伊野近富（文学部非常勤講師）